

## 8月1日 森林環境シンポジウム平井知事基調講演

(狩野) ……智頭町、三朝町、日南町、その3町で進めております。この3町は県内の3大河川の源流部にあたりまますけれども、その3町で同じような共通テーマを持った3町としていろんな活動をしておるところでございますけれども、この3町が久しぶりにまとまりまして、この源流のサミットをするというふうになりました。

今回は、17年に創設されましたいわゆる環境税を見直す時期にかかってきておりますので、こういったことを期に、我々の身近な森林をどうしていこうかと、どうあるべきかという議論を、再度、関係の町長さん方、それから諸先生方、そして県から知事にお越し頂いて、議論することになったわけでございます。私、総合司会を務めさせていただきます日南町副町長の狩野と申します。宜しくどうぞ、お願い致します。

この3町は源流部にあたりまして、中国山地、深いところにあるのですが、合わせますと県の総面積の22.8%、森林関係に絞って割合を考えますと、おおかた28%というような面積を持っております。それぞれが千代川、天神川、日野川という流域をもってございまして、我々の身近にある緑、水、これが県域の全体を擁しているというふうに考えられるものでございます。

今回のシンポジウムにあたりましては、先ほど申しましたけれども、3年間の、税の3年目ということでございます。環境保全税での3年目ということでございます。新たな税制ということでまたその使い道とか、それから中身とか、いろいろそこから議論がされてこようかと思っておりますので、そういった話の展開を、また県民の人も踏まえて頂いて、我々にとってもすばらしい税制になるように期待したいところでございます。

実はこのシンポジウムにあたりまして、衆議院議員の赤沢亮正先生から、シンポジウムの盛会ということで、電報を頂いておりますことをまとめてご報告させていただきます。

それでは、ただ今より、シンポジウムに移らせて頂きます。最初に基調講演を頂きますのは、平井鳥取県知事でございます。平井知事につきましては、皆様よくご存知のことと思っております。昭和59年4月に当時の自治省に入省されまして、鳥取県には平成11年の7月、総務部長としてお出で頂き、その後、副知事として歳を重ねられまして、平成17年鳥取県を去られました。その後、総務省に復帰されまして、先だってまではニューヨークの自治体国際化協会のニューヨークの事務所長さんということで、海外でもお力を発揮されていたところでございます。平成19年4月に鳥取県知事として選挙で当選され、今日に至っているところでございます。この日南町に足を踏み入れて頂きますのは、選挙後初めてではないかというふうに思います。そういったこともあって、たくさんの方にお出で頂きました。ありがとうございます。それでは平井知事、「森林と環境」というテーマでお話をして頂ければと思います。宜しくどうぞ、お願い致します。

(平井) 皆様、こんにちは。本当にこうして大勢の方にお越し頂きました事を、厚く御礼を申し上げたいと思います。今日は、源流3町のサミットということでありまして、ここ日南町、そして三朝町、それから智頭町の町長さんも来ておられますが、それぞれに源流地域である。この源流地域としてお互いの共通の課題を話し合ひましょう。議会の議員さんだとか、いろんな方々も交えて取り組みがされているわけでありまして。これは本当に先進的な取り組みでありまして、今、それぞれの地方自治体が自分の力で頑張っってやっっていかなければならない、そういう時にこうして同じ課題を抱えて、同じような社会構造、経済構造をもっているところが手を携えて、知恵を分かち合い、何かするべきことはないだろうか、一緒に考えることはないだろうか、そういう取り組みをされているわけですので素晴らしい取り組みです。

私も実は、この源流サミット、前にもよばれた事があってですね、そのときは中山間地域の町づくりとかで話をさせて頂いた覚えがあります。当時は副知事だったか、総務部長だったかと思っておりますが、縁あってこの4月から、この鳥取県のほうに帰って参りまして、皆様と一緒に再び地域づくりをさせて頂くとい

うことになりました。最初に4月に県庁に戻りましたが、13日の金曜日という、日が悪かったのでございますが、何とかかんとか元気でやっておりまして、今日までこうして県政のほう預からせて頂いております。まだまだ駆け出し者でございます。どうか皆様のご支援とご協力を頂きますよう、お願いを申し上げます。

先ほどのカノウさんのほうからお話がございましたが、ここに、日南町に来たのは、確かにそうですね、選挙のとき以来ということでございまして、日南町、何せ広いものですから、県下の10%ほどの地域なものですから、ひよつとすると制限速度を増したかもしれませんが、80キロぐらいずっと各地を駆けぬける、そんな思い出がございます。そんなこともございましたけれども、こうして懐かしく日南の皆様のところに戻って来られたことを本当にありがたく感謝を申し上げます。

実は、昨日は鳥取県のいちばん東側の端っこの若桜町のほうに行っておりました。それで若桜町の役場の人とか商工会議所とか農業関係者、林業関係者、そういう皆さんと懇談会といいますか、意見交換会をやっておりました。昨日は東の端でございまして、今日は西の端へとやってきたわけでございます。どうせなら町長も一緒に連れてきたら、源流勢揃いだった思いましたが、いずれにせよ昨日は若桜に行って参りました。

今ですね、それぞれに地域づくり、頑張っていこうという元気を出しています。昨日、その若桜の皆さんと昼飯のときから一緒だったのです。昼は、若桜で捕れた鹿でカレーを作ろうという試みがありまして、猪でカレーを作るということをやっていますよね。この度、試作品として鹿でカレーを作ろうと。先ほど伺いますと、ここらとか智頭辺りでも大変に鹿が増えて困っているということでございますが、その鹿をさばく事業所をつくったのですね、若桜に。珍しいものでございまして、でもそんなにあるものではありません。で、今、ジビエ料理というのですけれども、フランス料理とか野獣を食べる、そういう料理がありまして、それをこう、たくさん香辛料を入れたり、なるべく匂いを消したり美味しくして、それで食べると、そんな料理があるわけでありまして、そんなことを彷彿させるような、そんなカレーがあったのです。すごくジンジャーを効かせたものとか、あるいは真っ黒いペッパーを効かせているからピリツとしたカレー、その2種類に鹿の残った脂で出てきただしを取りまして、鹿のだしによるクリームスープ。カレーは真ん中で分けてありまして、ジンジャーと。それから鹿の脂によるクリームスープ、こういう3点でなんと500円という破格の、今、県庁食堂で出しております。県庁の第2庁舎の9階のレストランで出しております、これが今の猪カレーと一緒にですね、2つ目の商品として出しております。何とこれ、朝、毎日新聞を見ておりましたら、毎日新聞の全国面に出ておりました、意外と世間は注目するのだなということで、ずいぶん驚きました。毎日新聞のいちばん最後の社会面のいちばん最後の端っこの、大きな口を開けた若桜の町長が載っております、試食をしているところだと思っておりますが、そんなのが写っていました。鹿のカレーだということでありまして、若桜鹿カレーということでありました。こういうことに実は全国の人が大変注目をするようになってきてまして、だいぶその世の中の価値観がだいぶ変わってきたということの表れかもしれません。鹿というものがすごく田舎田舎した話なのですけれども、そうした自然環境というのに対する基本、それがカレーという新しい商品として地元のほう頑張っている、そんな話題が出てきているわけです。先ほどは鳥取大学の日置先生とお話をしていました、最近、商売繁盛だというお話もされていまして、なぜかという、やはり住民の県民の皆様のご関心も高まってきたと。山に対して今までそんなに興味を持っていなかったように思うと、5年や10年前まで。ところが最近はそのレッドデータブックを作る。そういう県で条例をつくったりしまして、やったりしました。そういう取り組みとか、あるいはいろんな意味でこれから森林環境、森林とか環境について考えなければならない。そういう意識が高まってきている。だから本当に県境、森のほうに入って、希少な植物を調査するとか保存をするとか、森を再生するとか、そうした研

究とか実践活動に対する事業が高まってきて、だから今日ここに来ておられる日置先生が非常に商売繁盛してお忙しいと。日南町も2泊3日で泊り込んで仕事をされているということでございます。だんだん、そういうふうに関心が変わってきたと思いますし、だんだん地域社会のあり方が変わってくるということだと思っております。

この環境の問題、森林の問題というのは古い課題だと思います。この地球全体の課題ということになるのだと思っております。考えてみれば、地球がこの世の中に誕生したのが46億年前というふうに言われています。それが海の中から生物ができてきたのが36億年前、46億年という長い歴史がこの地球にはあるのです。ところが、人類がこの世に誕生したのが200万年前、200万年前のことです。それから更に最近、産業革命がおこったと。それがだいたい18世紀ぐらいですか。ですから、2、300年ぐらいの間にだいぶその世の中が変わってきたと。森を伐る、イギリスでは製鉄を行うために山を伐っていったということがあります。フランスなんかもかつては森林国家だったのですけれども、農耕をやる、農業をやるのが主だと思っておりますが、今はかつての20%ほどになっている。日本はずばらしい国で、その中において70%ぐらいですね、森林という面積を持っているわけでありまして、実は世界にCO2という意味では貢献をしている国家なのです。いずれにせよ、産業革命からわずか2、300年越した時期だけで、46億年間続いてきたこの地球の環境というものが今、ズタズタになろうとしている。だからこそ、この地球環境というものをもう1度立て直して、これからも長く子々孫々に至るまで美しい環境を保たれるようにしなければならない。そういう時代感覚を持つ人々がどんどんこの世の中に増えてきたということだと思っております。

県内でもそうした意味で、ああやっぱり森は大切なのだ、あるいはその環境推進活動が大切なのだとそこに気づいて頂いた県民の方々がいろんな活動に今、入られるようになって、森が見直されるようになってきている。今、そういう時期に来ているだろうというように思います。

なぜ、イースター島が滅んだのかという話があります。これはイースター島、モアイ像がにょきにょきと海拔に立っているところです。ただ、今では荒廃した島になっている。ただ、モアイ像だけが何かを語りかけるようにそこに立っている。かつて、あそこでは大変な文明が栄えたのです。そのモアイ像が、巨大な石が切り出されて、そして島をつくり変えるぐらいのことをやったわけです。だから、なぜあれが倒れてしまったのか、こんなに荒廃してしまったのか、いろいろと研究がなされておりますが、ある研究ではこういうことを言うわけです。あのイースター島が南洋系の植物がいっぱい生えていた。りっぱな森林があったと。そこで、マンゴーとかそうした果物なんかいろんなものが生えていた。人が住み鳥もやってきて楽園であったわけでありまして、それが変わってしまったのはモアイ像ですね、あれを山から石を切り出して下ろさなければならない。そのことに丸太をいっぱい使うわけでありまして、丸太を並べて運ぶ。そうすると今では考えられないぐらいの森林破壊がおこってしまった。その森林破壊がおこってしまって森が失われると、実は食べる物もなくなってしまう。鳥がやってくるということは楽園だったのですが、鳥もやって来なくなるという、そういう中で人間は滅んでしまう。海へ向かって逃げ出そうと思っても、その海に向かって逃げる船を作る森すらなくなっていたのであります。このようなことも言われているわけでありまして、文明が森林破壊をおこしたというひとつの証左ではないかというふうに言われるものがあります。これはここだけではありません。例えばメソポタミア文明、チグリス・ユーフラテス川、あの2つの川に挟まれた流域のところも肥沃な大地でした。農業は栄えていました。その農業をあてにして、もうひとつ狩猟もありましたけれども、狩猟とか農業、これで栄えているところが次第にこう失われて、都市国家が衰退してしまったと。あの最盛期は今から4000年前ぐらいの紀元前2000年ぐらいがその最盛期で、シュメール国家が栄えていたのです。しかしそうした時代に、その上流のほうではレバノンズギが刈り取られ

ていったというふうに言われています。このレバノンスギというのは今でもレバノンの国の誇りでありまして、国旗を見ますと2つこうストライプがある、真ん中にですね、大きな杉の木が書いてあります。レバノンスギというのはその民族の誇りなのです。そのレバノンスギの広大な森があったわけです。これがこのチグリス・ユーフラテス川の上流にありました。しかし、これが豊かな森林であるが故に、その文明人から狙われたわけでありまして、その燃料として使うとか、あるいは家にするとか船にする、大量に輸出する。ですから確かにメソポタミア文明の人たちは、海を越えてインドのほうへと出て行く、そういう船なんかも作ったわけですね。大量の木材を必要としたと。その間エジプトの人たちもこのレバノンスギを使っていました。あるいは、その時代によっては森を得たいために戦争になるというようなことすらありました。今では、レバノンスギはほぼ伐り取られてしまっていて、その森は失われています。その森が失われるところに、このチグリス・ユーフラテス川の下流も荒廃をしていきました。なぜかと申しますと、この森が失われたために養分がなくなってしまう。そういうわけで、その川自体に、それまで肥よく大地をつくる作用というものが失われていく。あるいは上流で木が伐り取られたということから、今度は塩害が、潮が、今度は下流のほうへと流れる。そうしてこの文明を支えるべき肥よくな大地というものが失われてしまった。そのことが言われているわけなのです。

このように、私たちがなんとなく思っている森林というものを、また森林が私たちに与えてくれる環境というものが、実は我々の文化的な生活、文明社会を支えているということが、歴史は教えてくれるわけですが、私たちが今ここに、源流地域3地域が集まりました。その源流3地域が、それぞれに豊かな森林を抱えている、このことの意義というのをもう1度考え直す必要があるのだと思うのです。この森をこれからも引き継いでいけるように、それを活用していく。またその森に対して働きかけて、自然環境の大切さというものを学ぶ。出来るようにしていく。そうしたいろいろな取り組みがこれから必要になってくるのではないかというように思います。

鳥取県の、後ほどそのテーマとなるというようにお話しがありましたけれども、この森林環境を保全するためにも、全国で3番目なのですけれど、3番目に早く森林環境保全税というのを導入しました。源流地域の皆様にも、当時いろいろとご意見を頂いたわけでありまして。

今、とりあえずスタートさせて頂いて3年間が経とうと致しております。今の仕組みは、住民税から300円、だいたいコーヒー1杯分ぐらいのお金です。年にそれだけでも協力してくれませんか。それから企業さんにも法人の均等割りの3%。そのくらい、だいたい同じくらいなのですが、そういうものを協力してくれませんかということで、財源をつくらせて頂いております。その財源を基にして、NPO活動等の森林を愛護するための活動に役立たせて頂きたいと。また強度の間伐、非常に込み入った非常に危険な状態にあると、自然が壊れてしまうような状態にある鬱蒼とした部分に限りまして、強度の間伐を行うということに充て役立てさせて頂いたりしております。

このことで今、つくっております。だいたい額は実は知れているのです。1億円ぐらいです。年間1億円ぐらいですから、全県で1億というのはそんなにたいした額ではありません。ただ、全県民に納めて頂くということで、県民の皆様にも条例に対する思い、重荷に対する思いというものを共用してもらいまして、それを森林環境の改善につなげるきっかけにしていこうということでもあります。

今、この森林の問題、林業の問題というのは、なかなか厄介な状況になってきているというふうに言われています。私は、これはある意味、林業政策自体が失敗してきたということの、その結果ではないかという気も致すわけでありまして、いずれにせよ、森というものを林業というものに対して厳しい環境があるのもまた、事実でございます。

今、なぜそういうことになってきたかと言えば、かつて我が国は広葉樹林をどんどん植え替えをしまし

て、そうしてスギやヒノキにするとか、そうした森林というのを植えていく。要は森というものを、今度は山を生産の場として、経済活動の場として全国的に展開をしていったわけであります。しかし、その一方で、一時期その昔は炭の需要が農村であったり、また木材の住宅需要とかもあって、一時、30年間かそこら、木材価格が急に上がっていった時代がありました。その上がっていった時代に、片方で山を植え替えることを全国で展開するのですが、もう片方で外材の導入を始めているのですね。その辺は価格政策の関係があって、価格を下げようということからそうしたことが始まっている。結局、ここが今日の林業の矛盾といえますか、林業生産の矛盾点のきっかけになっていると私は思います。

そうしたことで、片方で森はどんどんなくなっていくわけですが、材木の価格は下がって行ってしまふ。従いまして、なかなか今までのように昔なら手をかけた分だけ回収ができるという楽しみがあった山というものが、経済林として成り立ちにくくなってきているという状況に追い込まれて行って、それがなお更に、森に対する手入れがいき届かない、こうした悪循環になってきて、どんどん森に対して悪い環境が生まれてくる。そういうことになってきたわけでありまして、これは何とかしなければならぬということだと思ふのです。

また、世界の状況を見ますと、材木に対する需要というのもだんだんこう変わってきている、そういう時期になってきたと思ふのです。時代は変わってきたというふうに思います。

今、経済の中心が世界の中でアメリカとかヨーロッパ、そういうようなところにあったものが、どんどんと東アジアのほうに移ってきています。その森林を巡っては、今までいろんなところで伐採をしてくる動きがありました。かつてであれば、日本の商社も行きまして、東南アジアのほうに行っていましたね、マレーシアとかインドネシア、フィリピンとか行って木を伐ってやってきました。それはずい分当時、高度成長期ですね。向こうで悲観にさらされた時代があったこともご記憶にあらうかと思ひます。少数民族には果実、果物を採取して生きてきた人たちが、結局、丸太が大量に伐採をされて輸出をされてしまう。その結果として生活を得るはずの採取ができなくなってしまう。だから食べ物が取れなくなってしまう。魚とか、あるいは果物が得られなくなる。そうして大反対運動がおこったりします。そうして北米のほうでもアメリカの森林メジャーが確保しているわけでありまして、そういうところでもかなりの面積を伐っていくわけですが、これは自然保護活動に対する反発がおこってくると。

今、例えば鳥取西部の王子製紙とかをとってもそうです。王子製紙さんに子どもが就職したという人の話を聞きました。それはおめでとございましたと、今はどちらにいますかと言うと、今度ブラジルに行くのだと言うのですね。要はブラジルに王子製紙さんが向こうに会社があって、向こうで木を植えて伐り出すということをやっている。そういう時代になってきていますね。リ・フォレスト、再植林をする、森を蘇らせながらということになっている。このように世界的に森林に対する目がどんどん厳しくなっているというのは、ひとつあります。

1972年に、ヨーロッパのローマでローマクラブというのがありました。世界中の学者たちが集まりまして、自然環境について話し合いをしている。そこで世界中の人があつと驚いた考え方が出たのですね。それは地球というのは有限なのだ、たった1つのもので有限の存在なのだ。だからこの中で生きていくためには、その環境について持続可能なようにしていかなければならない。これを1972年にローマクラブが世界に向けて発信をしたのです。その10年後1982年、世界中の人たちが集まります。そうしてケニアのナイロビで地球環境についての会議が開かれる。更にリオネジャネイロ、ブラジルで地球サミットが開かれる。リオネジャネイロの地球サミットの時には、森林についての会議もなされました。そうして森林環境についての目標も定められました。その持続可能な森林保全ということが打ち出されたのであります。それが1992年の地球サミットのときになります。それから更に1997年、京都議定書が結ば

れて、世の中の二酸化炭素、温室効果ガスを世の中から抑制しなければならないと。それは世界中で話し合いました。先般、6月にサミットがあり、ドイツで各国の首相が話し合いました。2050年までには、今のCO2というものを半減しようと。その排出量を半減しようという、そうした努力について真剣に検討するというような合意がなされました。ちょっと曖昧になっていますけれども、要は目標としては半分にしよとということで、これからきちんと話し合ひましょうと。それは今まで反対をしていたアメリカとかも含めて、これから話し合ひましょうというところでは少なくとも合意はしたというのが今の状態です。

来年、洞爺湖でサミットが開かれる。北海道で日本のサミットが開かれるということでもあります。誰が総理としていくのか私もよく分かりませんが、この間の結果が出ましたので、私は実は安倍総理は辞めたほうがいいと言っているものですから、それはどうなるか分かりません。考えれば、この間の参議院選挙の結果も、皆さんもびっくりされたと思うのです。いろいろとその結果について、もちろん当否はいろんなことを言う方はあるかと思いますが、私はこれは地域の怒りが表現されたなと思いました。今、小泉さんの構造改革をずっとやってきて効率至上主義ですね、世の中を動かそうとしてきたわけでありました。しかし、私ども鳥取県、あるいは日南町、智頭町、三朝町というところで、では小泉さんになってから何か恩恵があったかなというとうとうとあまりない。むしろ、どんどん失業率は高まってくるような感じもありますし、この山の問題もそうです。農業の問題もそうですが、今打ち出されているのは、田んぼだったら10%ぐらいしか適用がないようなのが目玉商品になって大きくしなさいと。やっぱり確かにおかしいのですよね。今の国の国政のあり方について、国民は明確に否定できない意思表示をしたというのが今回だったと思うのです。ですから政府も与党も含めて、この結果というのを真剣に受け止めて、もっと地方に温かみのある日の当たるような、そうした行政に、政策に転換しないといけない。安倍さんも内閣として今回、安倍さんを選ぶか小沢さんを選ぶかという選挙をやって戦ったわけですから、それでこうした結果が出たのであれば、本来は潔くここで政権交代をするべきではないかというふうに思うのですが、それは私の考えで、とにかく誰が出てくるか分かりませんが、来年とにかくサミットは開かれるということと言いたかったのですが、その来年度、このサミットで日本を大舞台にしてこれからの地球の環境について話し合おうというようになってきているわけです。

さて、その鳥取県の現状について、それから、これから向かっていく何かヒントになるようなものというものはないだろうか。確かに今、閉塞感が、皆さんもそれを感じていると思うのです。特に山の問題についてどうしたらいいのだろうか。とにかく財価は下がっていくという話をしました。しかし、時代は変わりつつあると先ほど申し上げたのは、今、こういうふう環境に対する目線が非常に厳しくなってくる中で、片方で東アジアに経済の中心がやってきます。ですから中国、ここは今、北京オリンピックもある、上海の万博もある、今、すごい勢いで建設事業をやっています。ですから、木材が足らなくなっている。そういう状態に今、入ってきていますね。また、ロシアもそうです。極東地域も、工業から少しずつですが進んできている。そのロシアにおいても中国においても、森林の伐採については非常に厳しい目で見られておりました。中国の大きなスローガンというのは、砂漠化を防止するという事です。砂漠にどんどんなっていて、特に北京の近郊の辺りにですね、どんどん砂漠化の波がやってきます。こっちに黄砂があれほどようけ飛んでくるわけでごさいます。この砂漠化がどの程度の規模で起こっているかという、だいたい年間ですね、中国では2000km<sup>2</sup>の規模で起こっているといえますね。参考までに、鳥取県の面積を言うと、これが3700でございますから。そうすると、だいたい6割ぐらい、鳥取県のだいたい6割ぐらいがどんどん砂漠に変わっているという事ですね。だから慌てているわけですね。もう、木を植えなければならない。木を伐るどころの話ではないですよという、こういう話になってくるわけです。現にそういう事が、この海を越えた向こう側で起こってきていますので、木材の需給バランスというのが、トレンドとして変わ

りつつあると、私たちは見ていいと思います。今、かつてですね、だいたいm<sup>2</sup>あたり8000円ぐらいだったのが、今、1万2000円台。まあまあ、見込みのようになってきている。そのような状況に変わりつつありまして、材価もですね、今、かつてとは違って、底値から少しく上向きになってきている。もちろんですね、いろんな問題があります。ご案内のように、最近使われる材は、あまりよくなくてもいいと。それを合板にしたり、修繕材にしたりっていう事が多いですし、細いデザイン。だから太くて装飾的な樹齢何十年とか、そういうですね、今まで高級材と言われたものが、需要は相当減ってしまっていて、ですから、高級材と低級材との材価があまり変わらなくなってきているという、そういう裏目はありますけども、トータルで言えばですね、その材木の需要というものは変わりつつあって、材価というのも底があってしっかりしてくる時期ではないかという事が言われたわけでありまして。

鳥取県ではですね、今、間伐材を伐り出して頂ければ、それに対して、m<sup>2</sup>あたり4000円、助成をしましょうという、よそではあまりやっていないのですね、珍しい助成制度があります。その気持ちも、要は山をですね、もっと動かして頂きたいという事なのです。山は確かに笑っているだけで放っておくとどうなるか。それはどんどん延びてきます。ですから日が当たらなくなってくる。山のその下、山には下草が生えなくなってくる。また、間伐をやらないという事になりますと、その荒れ方というものは、さらに激しくなってくる。このまま放っておいていいはずはないだろう。ですから間伐をするという事で、山に対して山の手入れという事をしていって、それが同時に、その間伐を伐りだせば、それは経済的にもある程度は出るでしょう。ですから4000円の助成という事を今、やっているわけでありまして。これを加えさせて頂ければ、1万2000円を足す4000円と。1万6000円ぐらいの価格水準かなというふうに思ってもらっていいだろうと思います。

そういう事で何かしらですね、こうバランスを取りながら、山を動かし始める時期に来たのではないかと。今までは見守ってきた時期でありましょうけれども、もう伐期がやって来ています。ですから伐ろうと思えば伐れるわけでありまして、そうした間伐の動きを何とかこう、進められないだろうかという事なのです。これは、空言のように思われる向きもあるかもしれませんが、今、県内でいくつかですね、そういう事を自信持って語れるような話ができていると思います。

先般も私は、今日も織田町長をはじめ、町の皆さんが来られていますが、智頭町の方にお伺いを致しました。智頭町の東宇塚という集落に入らせて頂きました。そこは、林業について非常に熱心に取り組んでおられる赤堀さんという方がおられまして、そのご一家だけではなくて周りの人達も一緒になって、今、大きな夢を持ってその山を持っています。そのやり方はですね、手作りで作るのですね。そこまで林道はもちろんきているわけでありまして、そこから先はですね、自分たちで林道をつくっていくと。林道も立派な舗装をしたものをやるっていうわけじゃないのです。とにかく、この小さなブルドーザーが通れるぐらい、進入出来るぐらいのことをやっていた。そうすると、自分たちでも出来ないことではない。それを山の中に通していきまして、その作業道の上下ぐらいは伐採をして、その下の方にこう下ろしていく。そうして出していくという事ですね。これもですね、地域の皆様がやっておられます。

ここに鳥取大学からも何ほかお手伝いに来てもらったりですね、それから、実は県の地元のその森林関係の職員もお邪魔させて頂いて、お手伝いさせて頂いたりしています。何でもやろうとしているのではなくて、要は、林の伐採の団地を作ろうという事を考えています。そうしてその林業のですね、コストを下げようじゃないかと。要は、お金をかけて伐りだす、間伐をするという事では、これはなかなか採算が合わないかもしれないです。ただ、これも経済行為ですから、なるべくお金を掛けずに、その間伐をして財務を消化する。そういう仕組みを何とか地域でつくれないかという事で、いろいろと試行錯誤をしながら今、ここにたどり着いてきているのです。その皆さんはですね、大きな図面を持っています。昔の航空写

真なんかも見えています。そうすると、だいたいどこがどのぐらいで、こう埋められたものかというのを把握します。山のその実は地質のですね、図面というものも持っています。この地質の図面はその鳥取大学にデータベースがあるので、それを借りてきてやっていますね。そこで、断層があるとかというような危ない所は抜きにして、それ以外の所は稜線をなぞるようにしてですね、作業道をここに引きましようという、自分たちで、こう線を引けるのです。これ素人さんですよ。素人さんが専門家のアドバイスを受けながらやっている。そうしてやっていくとですね、あんまり無理なくやれるのです。実際、その林道、作業道を開設しているのは誰かというとな女性達です。その村の奥様方とかですね、あるいはその県庁に入って、まだ間もない職員が研修がてら、作業を、これ女性職員ですけれども、林業の女性職員がやって入っていたと。こんなふうにしてですね、実際にこう作業道を開設して伐りだしをしています。そうすると、これもほとんど自分たちの労力だけでやっていますので、これにはあまりお金はかかっていません。さらに、実は県の方からの支援をして、その道具をですね、自分たちでも揃えているというような状態です。ですから、この皆さんは、計算をしてみますと、間伐材を伐り出して、充分、採算が合う。これを、その団地として集積してやりますので、あまり大きくない所ですね。自分たちの村の中の場所を決めて、そこを集中的に、こう間伐を進めていきますので、効率的にやる事ができるわけですね。こういうモデル的な団地というのも、私も鳥取県としてはですね、是非これから増やしていってらどうかと思っています。これは、要はその地元の方々の中で1人でも、2人でもまず、元気を出して頂く方が必要です。ですからそのリーダーになって下さる方、そうした鳥取型のこうした作業道を開設する開設士というものを私どもが設定を致しまして、その研修を受けて頂いてそのモデル型の作業道開設士になって頂くと。そのリーダーの方が1人とか2人とかですね、その集落の中でいてほしい。それを県も、そうした研修などで支援させて頂こうというふうに決めました。また道具が必要になります。その道具についてもですね、これは、県の方で、この度6月の私が就任した後に、補正予算も組ませて頂きまして、今、県内で、そうしたいろんな道具に対する事業ですね、森林組合にはついては、その国庫の助成があるのですが、それ以外はなかった所でありまして、これについてのその助成制度も、私どもの方でこしらえさせて頂いております。それに、先程申し上げた4000円の間伐補助もありますし、それと組み合わせて考えて頂ければ、本当で本気でやればですね、今、山を動かせる、そういう仕組みもできてきているということだと思えます。こういうモデル的な所が今、県東部などでですね、若干こう、ちらほら始まりました。非常にその地域の方々はいきいきとやっておられますので、もしご興味があればですね、見て頂いてご検討頂いたらいいじゃないかと思えます。

また、最近はですね、山を伐りだす人達が増えています。それは素材業者という方々でありますけど、とにかく山に入って伐っていく。今までは森林組合だけでありましたけれども、それ以外の事業者ですね、そうした山を伐りだしていく、そういう業者さんも少しずつではありますけど、増えてきています。これやっぱり、材価が変わってきた、その結果じゃないかと思えます。ですからこうした方々にも、県の方でも今、支援をさせて頂いております、その道具などの支援をさせて頂いたのが今回であります。

それと合わせてですね、更にもっと踏み込んで、もっと組織的に、この木材の流通の仕組みをつくろうじゃないかというようなことで立ち上がって頂いたのが、ここ、日南町の皆さんであります。森林組合長の入澤さんとかですね、元気を出されまして、このオロチをこしらえて、そうした会社を立ち上げて LVL を生産していこうという事になって参りました。素晴らしい事だと思えます。5万5000㎡くらい素材を集めてきて、3万㎡くらい出荷をしようかと。それも、この地域の材をなるべく使っていこう。もちろん、周りの県境を挟んだ地域の方々の木材も入れながらしていこうということです。そういうふうに、木材が、木が動き始めれば、森に対する人々の考え方も変わってくるだろうと思えます。そういう意味で、今の日南町の



プロジェクトというのはモデル的な事ではないかなと思っております。県としてもこれ、精一杯ご支援をしていこうというように、いろいろと今ですね、相談をさせて頂いているところであります。

森さんという営業所の関係の方がですね、その人生を、この日南の方に懸けてみようという事で、その社長としてご就任なさろうとしていますし、是非、応援をさせて頂きたいと思っております。この取り組みと交互するようですね、先程申し上げました、この日南の素材関係業者が今、連合体を組もうとしています。その木材を供給する為に、流通者と素材業者が集まりまして、今までは、ひとり親方みたいな方々が多かったと思うんですが、安定してですね、安い、比較的その競争力のあるその素材生産をしていこうという事で、共同化をされようという事で、団結を深められているわけでありまして、これも非常に注目に値する事だと思うのです。こうしてですね、地域を上げて自分たちの山を伐ってみようじゃないかという動きが始まる。あるいはここ日南町のように、もっと企業的にですね、規模のメリットというものもつくり出しながら、新しいその森林のあり方、その林業のあり方、生産のあり方、技術のあり方をつくり出していこうという地域も生まれて来ているわけでありまして、私どもですね、鳥取県からそうした林業の森の新しい形をつくっていければ、非常に素晴らしい事なのじゃないかというふうに思います。

今日は、その源流地域の皆様、3町の地域というのは、いずれ劣らぬ森林集積地帯であります。鳥取県自体が、森林集積の土地柄ではありますが、その辺りも水源としての高名を担う所としてですね、また森林からのその林業生産の母体として発展する地域だと思うのです。確かに、その大化けする事はなかなか難しいかもしれませんが、今、確かにこう、変わり目といえますか、効果が出て来ている事を、是非、皆様にも認識を頂いてチャレンジ精神を持って頂ければありがたいのではないかと思います。県も町も、これは総力をあげて応援をしていく話になってくるものだと思いますし、今回、参議員選挙の結果を受けてですね、国も是非、こうした山の問題、取り残された地域が蘇ろうとしている努力に手を貸すという、そこに政策を変えていってもらうように働きかけていく必要があるのではないかと思います。

今、この鳥取県内ですね、森林とか環境に対する興味が大変高まっている事のひとつの現れが、その企業の共生の森がどんどん広がっていく事だと思うのです。この中で言うと、智頭町さんがごうぎんさんの共生の森を扱って頂いておりますし、その他、江府町さんとかですね、鳥取市にもできてきています。例えば、先般、サントリーさんですね、江府町の方に進出をされるという事で今、工場を立ち上げています。その工場をつくる、奥大山の所にありますが、非常にいいイメージがあるという事で帰って来られたのです。先般のそのサントリーさんの話を聞いて、聞かせて頂きましたし、あの阿蘇の方の工場にも行って参りました。やっぱりイメージがいいと言うのです。ただ奥大山という言葉に拘りがあったという事も言っていました。この地域というのは、水源として清らかな水のイメージが強い。健康とかですね、自然の宝庫というイメージが強い。それが今、ブランド化されてきているのだと思うのです。それだけでなく、さらにその企業として、社会にその事を訴えようとして、共生の森という事を始めた。県も入ります、地元も入りまして、その森を提供する。それを管理していくという契約を企業さんが結んでいるという事でありまして、こうした形態がですね、江府町のその工場のメーカーのところに行きました。同じように、そのコカ・コーラもですね、伯耆町の所で工場のメーカーの方に、やはり共生の森を移しました。このようにして、企業活動の一環としてのCSRという社会的責任の表現として、森を管理するという事も、非常に一般的になってきたのだと思います。ですが、これもですね、ある意味、森と社会との関係が変わってくる効果が出ているのじゃないかと思えます。

私たち日本人は、林や森に対する憧れというのを常に心の中心に持ってきたと思いますし、その林や森を愛する事で、自分たちの生活の豊かさを感じてきたのだというふうに思います。例えば、北原白秋の

からまつ歌なんかがありますよね。「からまつ林を過ぎて、からまつをしみじみと見き、からまつはさびしかりけり。たびゆくはさびしかりけり。からまつ林を出でて、からまつ林に入りぬ。からまつ林に入りて、まだ細く道はつづけり。からまつ林の奥も、わが行く道はありけり。霧雨のかかる道なり。山風のかよふ道なり。」そういう素晴らしい歌があります。こんな歌の詩情が日本人の感性だと思うのです。私たちは、おそらく縄文の昔から詩吟を愛する事、詩吟と共に生きる事で私たちの地域社会、人生を広げてきたのだと思います。鳥取県は、そしてこの源流地域は、その中で中心的役割を果たしていける能力と力量と自然環境を持った所だと確信します。今日のこの源流サミットにおきます森林環境シンポジウムがきっかけとなりまして、更にその森を動かしていこう、山を伐り出していこう、更に暮らしを豊かにしていこうという動きに繋がっていく事を、切にお願いを申し上げまして、また合わせて皆様のご健勝と発展のお祈り申し上げます、私の方の話とさせて頂きたいと思っております。どうもありがとうございました。

(狩野) 平井知事さん、ありがとうございました。それぞれ、皆さん、知事のお話の中からキーワードを感じられたと思います。私は、森林が運命を支えるという言葉が知事の方から出ました。確かに森林が、運命を支える。我々は運命を支えているというふうに感じた所でございます。知事のお気持ちが、我々私たち3町、それぞれ独立、自立、単独の道を歩んでいる3町に対してその山林資源を活かして、もっともっと頑張れという激励を頂いたのじゃないかというふうに思います。せっかくの機会でございます。まだ若干、時間がございますので、会場の方から知事へのご質問なり、何かお話ししたいという事がございましたら、2名様程度でお受けしたいと思っておりますがいかがでしょうか。挙手して頂いてお名前と、それから要点を簡潔にお話頂ければと思います。どうでしょうか。

(狩野) はい、どうぞ。

(古都) 日南町の古都でございますが、お尋ねします。平井知事はふるさと納税に理解をお示しになっておるようでございますけれど、私どもはもう少し広い意味でですね、環境税的なものを日本全部の中で考えて頂いて、都会で経済的なもので発生するものについては、CO2を吸収するその山林とか、そういうものについて、そちらの方で取り組みをして頂くというようなやり方は出来ないものだろうかという事で、環境税という考え方というものをもっと進めて頂いて、何かいい方法を考えて頂きたいというふうに思うわけですが、その辺いかがでしょうか。

(平井) 日南町の古都さんのほうからお尋ねありました、その環境税のような事ですね、私はその1つの大事な方向性があると思います。実は、今、ご紹介がありましたように、ふるさと納税は提唱させて頂いております。あれは要はですね、今、あまりにも東京とか愛知県とかと比べますと、私どものような所は財政的に窮迫しておりますし、ふるさとに貢献をしたいという、ふるさと誰にでもありますから、その意思を選択肢として表現できるような制度をつくるべきじゃないかという事で、提案をさせて頂いているわけでありまして。東京とかですね、神奈川とか、だぶん反対も強いわけでありまして。これどうなるか分かりませんが、それは、そうした意味でやっています。それとはまた別にですね、今のお話のようになった環境について考える税のあり方というのはないだろうか。実は私どもが、これまでやってきた300円、これ実は500円に上げればいいなと思っているのですが、1人300円ご協力を頂くという森林環境保全税みたいな、こういう税金はですね、今、24、5件ぐらい取っている所あると思います。だいたい過半数ぐらいになっていると思います。それぐらいですね、一般化してきました。ですからこの際、本来であればですね、もう全国的な税金にしてもらって、大都市でもそういうものを納税するようになって、その大都市の税で納めたものがですね、森林に対してCO2の吸収に対して、財政のひとつの仕組みが出来れば、これは素晴らしい事だというふうに思います。実は鳥取県民の県議会ですね、鉄永県議会議長はですね、今、実はそれをやろうというので働きかけをしようとしていまして、彼は今、全国議長会の副議長

なものですから、それをですね、全国議長会の中でも議論できないかという事をやっています。うまくいけばですね、そうした事で話が浮上してくるのだと思いますし、その時には私どもも、是非、その烽火を上げにいきたいと思いますけれども、なかなか、国全体の税金の話ですので、すぐに動くかどうかという、なかなか難しいかもしれませんけれども、そうしたアイデアをですね、これからも素晴らしいアイデアと思いますから、訴えていきたいと思います。

(狩野) せっかくです。もうお一方、お手を挙げて頂ければと思います。はい、お願いします。

(長谷川) すみません。私、米子からやって参りました長谷川と申します。生まれはこの日南町でございます。先程、知事のお話を聞いておりましたら、入り口のほうの話はすごくよく分かったのです。そう言えば、間伐材はどんどん出てきたわけです。そうすると、今度は出口が見えないのですよね。私どもも、日南町の森林組合さんとタイアップを致しまして間伐材を利用したいろんな製品を作っております。鳥取県の認定商品にも指定されております。そういった中で県の公共事業に利用して頂く機会が非常に少ないという事です。そうしたものをどんどん使って頂けるようになれば、この間伐材の利用価値が増えてくると思いますし、そういった面をどんどんと活用しようかと。それと私自身も今、鳥取県の鳥取環境ネットワークのコーディネーターをやっております、今、4Rの関係でいろいろ地方に出向いて勉強会をさせて頂いておりますけど、非常に知事の考えがよく分かったのですが、なかなか我々のほうとすれば、出口が見えないというのが実情じゃないかと思っておりますので、そのへんのご見解を聞きたいと思っております。

(平井) 今、米子の長谷川さんのですね、おっしゃった間伐材を更に利用していくという事でありまして、これは県庁だけでなく民間とかですね、海外での輸出なんかも含めていろいろと掘り起こしていくべきだろうと思っております。そういう意味で、間伐材の伐採などがだんだんと盛り上がってくると。そうすると、素材の方が比較的、値段がずっと下がってくるといいますか、あまりお金を掛けなくてもよくなっていく。それが、更に需要につながっていき、いずれはこうした東アジア全体にですね、材木の需要などもありますので、どっかに吸収していくという事を念頭において申し上げておりました。それも、もうちょっと具体的な話として、その中の公共利用という所がありますけれども、県庁として今、この木材をですね、県産材をもっと活用すべきだと私も思います。ですから今、実は庁内に号令をかけていまして、今年末頃までに、今年いっぱいぐらいにですね、予算編成時期の前までに、県庁としてこの間伐材、そうした県産材を公共事業だとか、あるいは施設ですね、県の施設建設などの中でどうやって活用していくか。それを具体的にこういう事に活用というプログラムをですね、つくるように今、号令をかけている所でありまして、年末までにはそうしたものをまとめてみたいと思っております。それはもちろん、県の公共事業のパイ自体がかつてのように大きなものになっていませんし、その建築事業もですね、県の方は民間と違いまして、そんなに箱ものを今、造っていないものですから、発生するわけではありませんけど、ただその中でもできるだけ県産材を使うというようにですね、転換をしていきたいと思っています。

(狩野) ありがとうございます。以上で質疑を終わらせて頂きます。平井知事におかれましては、お忙しい中を、本当にありがとうございました。この後の3町の町長さん方もシンポジウムにもご参加頂きまして、またそれなりのご意見を頂戴したいと思います。平井知事、これから全国に向けて、我々の、山を愛する我々の気持ちもまた全国に向けて、いろいろとお伝え頂ければというふうに思います。もう一度、皆様方の知事への感謝を、拍手でお願いしたいと思います。

それでは、次の会場設営のために、10分ほど休憩をさせて頂きたいと思っております。